文藝

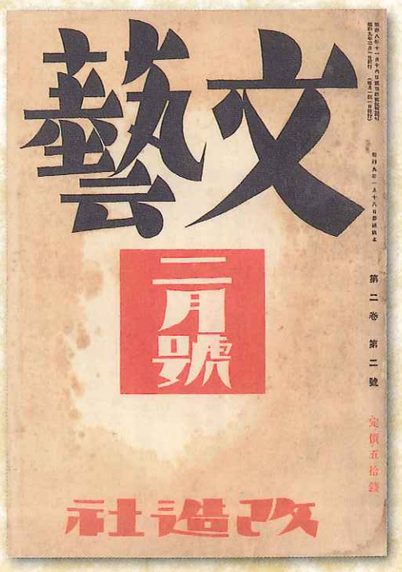
復刻版

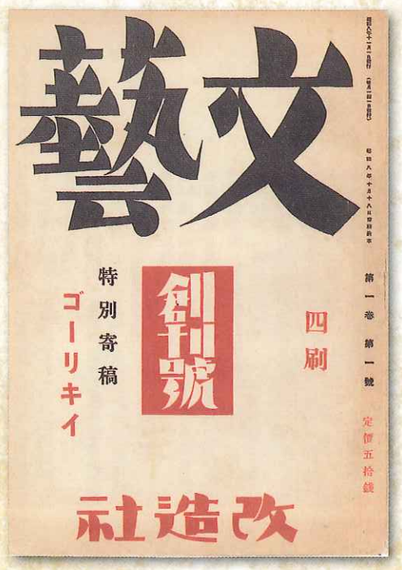
改造社発行　全60巻・別冊1

文芸復興の機運を背景として、
『文學界』の一か月後に創刊。
昭和戦前・戦中期を代表する
文芸雑誌、待望の復刻！

一九三三(昭和八)年一一月～一九四四(昭和一九)年七月

発行＝改造社
解説＝山下真史
推薦＝安藤宏・太田哲男・川津誠・木村一信
配本＝全12回配本(二〇一一年六月～二〇一五年一月)
定価＝本体揃価格　九五六、〇〇〇円＋税





不二出版

【復刻版】

文藝

全六〇巻・別冊一

◎概要
体裁＝A5判・上製・総約三二、〇〇〇頁
定価＝本体揃価格　九五六、〇〇〇円＋税
別冊＝解説(山下真史)・総目次・索引
(別冊のみ分売可＝本体価格三、〇〇〇円＋税：
ISBN978-4-8350-6973-9)
配本＝全一二回配本
(二〇一一年六月～二〇一五年一月)
原本提供＝山下真史氏・安藤宏氏

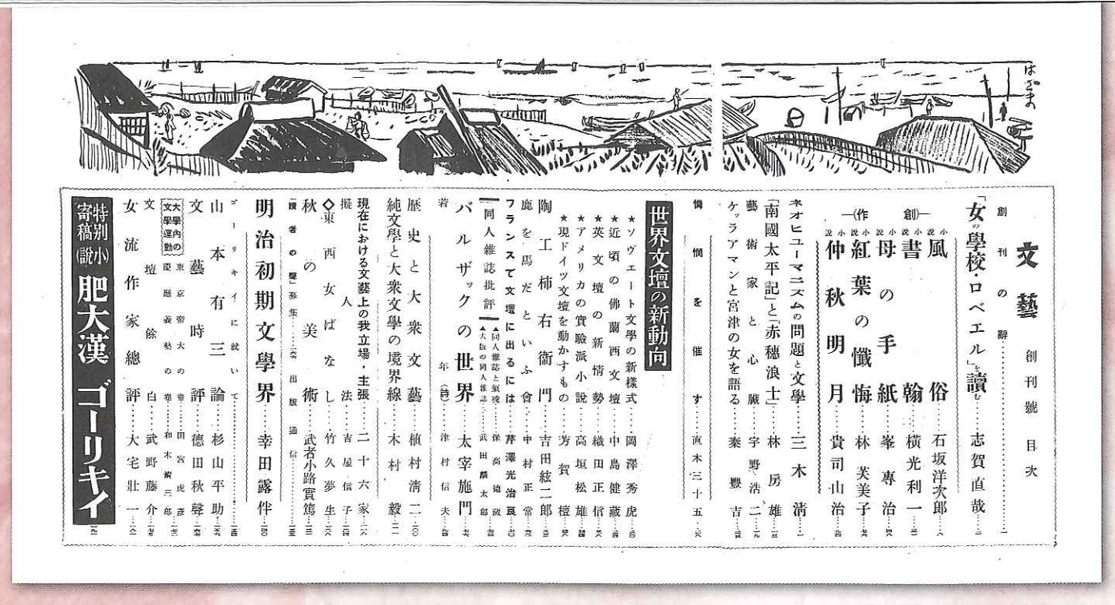
配本	復刻版巻数	原誌巻数	原誌発行年月	本体価格 配本年月
第1回配本	第1巻	第1巻1号	昭和8年11月	2011年6月 54,000円＋税 8350-6900-5
	第2巻	第1巻2号	昭和8年12月	
	第3巻	第2巻1号	昭和9年1月	
	第4巻	第2巻2号	昭和9年2月	
	第5巻	第2巻3号	昭和9年3月	
第2回配本	第6巻	第2巻4号～5号	昭和9年4月～5月	2011年9月 82,000円＋税 8350-6906-7
	第7巻	第2巻6号～7号	昭和9年6月～7月	
	第8巻	第2巻8号～9号	昭和9年8月～9月	
	第9巻	第2巻10号～11号	昭和9年10月～11月	
	第10巻	第2巻12号～3巻1号	昭和9年12月～10年1月	
第3回配本	第11巻	第3巻2号～3号	昭和10年2月～3月	2012年1月 82,000円＋税 8350-6912-8
	第12巻	第3巻4号～5号	昭和10年4月～5月	
	第13巻	第3巻6号～7号	昭和10年6月～7月	
	第14巻	第3巻8号～9号	昭和10年8月～9月	
	第15巻	第3巻10号～11号	昭和10年10月～11月	
二〇一一年度合計　本体二一八、〇〇〇円				
第4回配本	第16巻	第3巻12号～4巻1号	昭和10年12月～11年1月	2012年5月 82,000円＋税 8350-6918-0
	第17巻	第4巻2号～3号	昭和11年2月～3月	
	第18巻	第4巻4号～5号	昭和11年4月～5月	
	第19巻	第4巻6号～7号	昭和11年6月～7月	
	第20巻	第4巻8号～9号	昭和11年8月～9月	
第5回配本	第21巻	第4巻10号～11号	昭和11年10月～11月	2012年9月 82,000円＋税 8350-6924-1
	第22巻	第4巻12号～5巻1号	昭和11年12月～12年1月	
	第23巻	第5巻2号～3号	昭和12年2月～3月	
	第24巻	第5巻4号～5号	昭和12年4月～5月	
	第25巻	第5巻6号～7号	昭和12年6月～7月	

配本	復刻版巻数	原誌巻数	原誌発行年月	本体価格 配本年月
第6回配本	第26巻	第5巻8号～9号	昭和12年8月～9月	2013年1月 82,000円＋税 8350-6930-2
	第27巻	第5巻10号～11号	昭和12年10月～11月	
	第28巻	第5巻12号～6巻1号	昭和12年12月～13年1月	
	第29巻	第6巻2号～3号	昭和13年2月～3月	
	第30巻	第6巻4号～5号	昭和13年4月～5月	
二〇一二年度合計　本体二四六、〇〇〇円				
第7回配本	第31巻	第6巻6号～7号	昭和13年6月～7月	2013年5月 82,000円＋税 8350-6936-4
	第32巻	第6巻8号～9号	昭和13年8月～9月	
	第33巻	第6巻10号～11号	昭和13年10月～11月	
	第34巻	第7巻2号～3号	昭和13年12月～14年1月	
	第35巻	第7巻4号～5号	昭和14年2月～3月	
第8回配本	第36巻	第7巻6号～7号	昭和14年4月～5月	2013年9月 82,000円＋税 8350-6942-5
	第37巻	第7巻8号～9号	昭和14年6月～7月	
	第38巻	第7巻10号～11号	昭和14年8月～9月	
	第39巻	第7巻12号～8巻1号	昭和14年10月～11月	
	第40巻	第8巻2号～3号	昭和14年12月～15年1月	
第9回配本	第41巻	第8巻4号～5号	昭和15年2月～3月	2014年1月 82,000円＋税 8350-6948-7
	第42巻	第8巻6号～7号	昭和15年4月～5月	
	第43巻	第8巻8号～9号	昭和15年6月～7月	
	第44巻	第8巻10号～11号	昭和15年8月～9月	
	第45巻		昭和15年10月～11月	
二〇一三年度合計　本体二四六、〇〇〇円				
第10回配本	第46巻	第8巻12号～9巻1号	昭和15年12月～16年1月	2014年5月 82,000円＋税 8350-6954-8
	第47巻	第9巻2号～3号	昭和16年2月～3月	
	第48巻	第9巻4号～5号	昭和16年4月～5月	
	第49巻	第9巻6号～7号	昭和16年6月～7月	
	第50巻	第9巻8号～9号	昭和16年8月～9月	
第11回配本	第51巻	第9巻10号～11号	昭和16年10月～11月	2014年9月 82,000円＋税 8350-6960-9
	第52巻	第9巻12号～10巻2号	昭和16年12月～17年2月	
	第53巻	第10巻3号～5号	昭和17年3月～5月	
	第54巻	第10巻6号～8号	昭和17年6月～8月	
	第55巻	第10巻9号～11号	昭和17年9月～11月	
第12回配本	第56巻	第10巻12号～11巻2号	昭和17年12月～18年2月	2015年1月 82,000円＋税 8350-6966-1
	第57巻	第11巻3号～5号	昭和18年3月～5月	
	第58巻	第11巻6号～10号	昭和18年6月～10月	
	第59巻	第11巻11号～12巻2号	昭和18年11月～19年2月	
	第60巻	第12巻3号～7号	昭和19年3月～7月	
別冊(解説・総目次・索引)				
二〇一四年度合計　本体二四六、〇〇〇円				

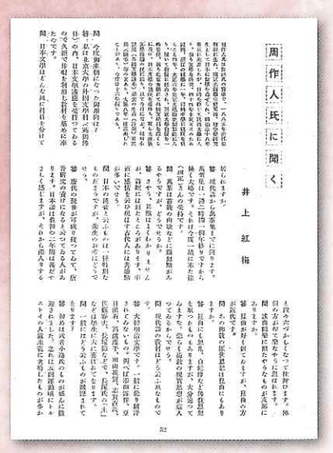
※価格の下の数字はISBNを示す。数字の前に978-4-が付きます。

＊表示価格はすべて税別

不二出版
〒113-0023
東京都文京区向丘1-2-12
電話03-3812-4433
ファクシミリ03-3812-4464
振替00160-2-94084



『文藝』創刊号目次



「周作人氏に聞く」

「樺太への旅」

「文芸院音頭」

—復刻の辞—

『文藝』は、一九三三(昭和八)年一一月から一九四四(昭和一九)年七月まで刊行された、改造社発行の雑誌である。満洲事変を境として思想弾圧が強化され、プロレタリア文学の退潮にともない、文芸復興の機運を背景として、『文學界』『行動』に一か月遅れて創刊された。そして、『新潮』とならんで昭和十年代の代表的文芸雑誌となった。

創刊号の編輯兼発行人は石塚一徳、二号から山本三生で、編輯主任は徳広巌城(上林暁)。以後も小川五郎(高杉一郎)らが引き継いだ。創作・評論を中心とし、主な掲載作品には、石坂洋次郎「麦死なず」(第四巻第八号)、高見順「如何なる星の下に」(第七巻第一号〜第八巻第三号)、中野重治「空想家とシナリオ」(第七巻第八号〜第一一号)などのほか、戯曲では久板栄二郎「断層」(第三巻第一一号)「北東の風」(第五巻第四号)など、評論では保田与重郎、窪川鶴次郎、川端康成、杉山平助などが活躍している。新人発掘の面でも織田作之助「夫婦善哉」(第八巻第七号)などがある。

海外文学の紹介も積極的に取り入れた。創刊号にはゴーリキーの特別寄稿として小説「肥大漢」(上田進訳)を掲載した。その後も「アンドレ・ジイド研究」(第二巻第一号)、「マルセル・プルウスト」(第二巻第二号)、「スタンダアル研究」(第二巻第三号)と、立て続けに小特集を組み、その後も頻繁に掲載している。また、沈従文・竹内好訳「黄昏」(第三巻第一二号)、魯迅「ドストエーフスキイの事」(第四巻第二号)、郭沫若「日本文学の課題としての吾が母国」(第四巻第六号)等、中国の作家にも積極的に誌面を提供した。

一九四一(昭和一六)年の太平洋戦争開戦後は、より一層文芸雑誌に対する監視が厳しくなり、一九四二(昭和一七)年一月号は「戦ひの意志—文化人宣言」の特集が組まれ、その後も「国民詩特集」(第一〇巻第二号)、「日本文学の使命—日本文学報国会結成式に於ける祝辞」(第一〇巻第七号)、「大東亜文学者会議号」(第一〇巻第一二号)等、戦時色が際立つ誌面となっていった。そして一九四四(昭和一九)年、軍部の圧力により解散させられ、七月に『文藝』廃刊のやむなきにいたった。

弊社では同時期に刊行していた『文學界』の復刻版刊行を手掛けており、『文藝』を復刻刊行することで、昭和戦前・戦中期の文壇状況の研究がより一層進むことを確信する次第である。

不二出版

▼『文藝』関連年表 1933→1944

※年表の最上段の数字は西暦年、その下の数字は月を示す

一九三三

11 『文藝』創刊 ◆ゴーリキー(上田進訳)「肥大漢」
12 ◆川端康成「末期の眼」 ◆番匠谷英一「源氏物語」

一九三四

1 ◆中條(宮本)百合子「小祝の一家」 ◆徳田秋聲「金庫小話」
3 文芸懇話会結成 ◆井伏鱒二「講習実記」
4 ◆川端康成「踊子」 ◆直木三十五追悼特集
6 ◆林房雄「N男爵の平凡な半生」(〜八月)
8 ◆張赫宙「葬式の夜の出来事」◆室生犀星「詩よきみとお別れする」
9 ◆川端康成「浅草祭」(〜三五年二月) ◆井伏鱒二「饒舌」
10 ◆伊藤整「撫でられた顔」
12 ◆中條(宮本)百合子「冬を越す蕾」 ◆堀辰雄訳「リルケ詩抄」

一九三五

2 菊池武夫、美濃部達吉の天皇機関説を攻撃 ◆太宰治「逆行」
4 ◆中野重治「鈴木・都山・八十島」
8 ◆大宅壮一「文壇クーデター論」
9 ◆石川達三「霧海」
11 日本ペンクラブ結成 ◆久板栄二郎「断層」
12 ◆沈従文(竹内好訳)「黄昏」

一九三六

1 ◆林芙美子「稲妻」(〜九月)
2 二・二六事件 ◆魯迅「ドストエーフスキイの事」
◆高見順「路地」
5 ◆三木清「肉体の問題」 ◆鹿地亘「魯迅と語る」
6 ◆郭沫若「日本文学の課題としての吾が母国」
8 ◆石坂洋次郎「麦死なず」
◆井伏鱒二「一軒家」
11 ◆魯迅「中国文学運動に於ける統一戦線の問題」
12 ◆竹内好「最近の中国文学」

一九三七

1 ◆川端康成「最後の踊」
4 ◆久板栄二郎「北東の風」
5 ◆張赫宙「愛怨の園」
6 ◆井伏鱒二「西海日記」
7 蘆溝橋事件 帝国芸術院創設
8 ◆伊藤整「幽鬼の街」
9 ◆鹿地亘「現在中国文学界鳥瞰図」 ◆武田泰淳「抗日作家とその作品」
10 国民精神総動員中央連盟結成 ◆高見順「流木」
11 ◆中野重治「原の欅」
12 ◆中国文学研究会編「現代支那文学事典」

一九三八

1 ◆葉山嘉樹「万福追想」
3 内務省警保局、雑誌社に対し中野重治、宮本百合子らの原稿掲載を見合わせるよう内示
4 国家総動員法公布 ◆中島健蔵「肉声への希求」
5 ◆伊藤整「石を投げる女」
6 ◆張赫宙「雰囲気」 ◆日本映画と文芸(座談会)
7 ◆徳永直「陽子・道代・町子—父親の覚え書」
◆欧州より帰りて日本知識階級に与ふ(座談会)
8 ◆宇野千代「仔犬」(〜九月)
◆今日の新劇(座談会)
11 ◆戦争文学について(座談会)
12 ◆高見順「如何なる星の下に」(〜四〇年三月)

一九三九

1 ◆ペン部隊は何を見たか(座談会)
2 ◆徳永直「藁人形」 ◆張赫宙「朝鮮の知識人に訴ふ」
3 ◆坂口安吾「木々の精、谷の精」
4 大陸開拓の国策ペン部隊、満洲へ出発
警視庁検閲課、出版統制強化の方針を決定
ノモンハン事件 ◆小林秀雄「歴史について」
5 ◆亀井勝一郎「滅びの支度」 ◆詩歌について(座談会)
6 内務省、自由主義的図書・言論の取締りを強化
◆戦争の体験と文学(座談会)
7 ◆中野重治「空想家とシナリオ」(〜一一月)
8 ◆川端康成「母の読める」(〜四一年一月)
10 ◆ヨオロッパ戦争と文学を語る(座談会)
11 ◆宮本百合子「広場」 ◆伊藤整「吉祥天女」

一九四〇

1 ◆青野季吉「心霊の復活」 ◆同人雑誌に就いて(座談会)
3 ◆太宰治「善蔵を思ふ」
4 文芸家協会主催の文芸統後運動第一回講演会開催
5 ◆高村光太郎「自分と詩との関係」
6 ◆宮本百合子「転轍—昭和の婦人作家」 ◆大田洋子「墓碑」
7 ◆朝鮮文学特集 ◆織田作之助「夫婦善哉」
8 ◆満洲文話会「満洲文学について」
9 ◆高見順「私と商人との交渉」 ◆伊藤整「新聞読み」
10 ◆時代的考察(対談、小林秀雄・中島健蔵)
◆小津安二郎・池田唯雄「戸田家の兄妹」
11 紀元二六〇〇年祝賀行事 ◆岡本かの子「富士」(〜四一年四月)

一九四一

1 ◆横光利一「三つの記憶」
◆日本の古典(対談、長谷川如是閑・折口信夫)
2 情報局、各総合雑誌に執筆禁止者の名簿を内示
◆高村光太郎「国民的美意識」
8 ◆実験的精神(対談、三木清・小林秀雄)
9 ◆宇野千代「女の手紙」 ◆南方旅行(座談会)
10 ゾルゲ事件 ◆小林秀雄「カラマアゾフの兄弟」(〜四二年九月)
11 ◆太宰治「秋」
12 太平洋戦争始まる ◆周作人「日本の再認識」

一九四二

3 日本出版文化協会、用紙統制により、四月より全出版物の発行承認制実施を決める
4 ◆林芙美子「滝沢馬琴」(〜六月)
5 文芸家協会解散、日本文学報国会結成
6 ◆坂口安吾「真珠」
9 ◆火野葦平「眼」
10 ◆太宰治「花火」
12 ◆大東亜文学者会議号

一九四三

1 ◆戦争と作家(座談会)
2 ◆川端康成「父の名」(〜三月) ◆清水幾太郎「ラングーン日記抄」
3 ◆大東亜文化(対談、三木清・中島健蔵)
4 ◆宇野浩二「水すまし」
5 ◆川端康成「故園」(〜四四年六月)
7 ◆武田泰淳「中国と日本文芸」 ◆日華の文化交流(対談)
8 大東亜文学者決戦会議開かれる
10 ◆小林秀雄「文学者の提携について」
11 ◆葉山嘉樹「ある日の開拓村」

一九四四

1 ◆堀辰雄「樹下」
4 ◆壇一雄「出生まで」
5 ◆太宰治「武家義理物語—新釈諸国噺」
6 ◆高見順「春寒」
7 『文藝』改造社版、最終号

推薦の言葉

貴重な国際感覚

安藤　宏（東京大学教授）

『文藝』は、『新潮』『文學界』と並ぶ、昭和十年代の商業文芸誌の雄である。

改造社というバックボーンがあったせいか、ボリュームでは他の二誌をしのぐ勢いで、戦前・戦中の激動期の文学状況を読み解く上での文字通りの羅針盤である。

この雑誌の大きな特徴は、いたずらに文壇ゴシップに流れることなく、終始豊かな国際感覚を持って「世界の中の日本文学」を問い続けた点にあると言ってよいだろう。創刊当初から「世界文壇の新動向」を断続的に連載する一方、ジイド、プルースト、スタンダールらの小特集を次々に編み、昭和十年十月号では「ゲーテ特集」を大々的に組んでいる。これらが次第に「満洲文学通信」「朝鮮文学通信」「上海文学通信」といった記事に姿を変えていくのは、やはり時代のしからしむるところなのだろうか。結果的に旧「植民地」の日本語文学の状況をうかがい知る、実に貴重な資料になっている。

以前は古書市場で比較的多く見かけたこの雑誌も、発売禁止で入手困難な号もあり、近年では手元に揃えることがきわめて困難になりつつあった。今回の復刻を機に、昭和十年代文学の再評価が進展することを強く期待したい。

『文藝』編輯主任・高杉一郎

太田哲男（桜美林大学教授）

「円本」で知られた改造社が雑誌『文藝』を創刊した一九三三年、同社に入社したひとりに小川五郎（一九〇八～二〇〇八）がいた。『文藝』の初代「編輯主任」は上林暁だったが、三五年頃に第三代編輯主任となった小川は、四二年頃までその任にあった。改造社版『文藝』の編集の最も重要な担い手は小川だったというべきである。

小川は、戦後は高杉一郎というペンネームで、シベリア抑留経験を描いた名著『極光のかげに―シベリア俘虜記―』（岩波文庫）を残し、翻訳家としても知られた。

私は、最晩年の小川からの聞きとりをふまえ、『若き高杉一郎』を上梓したが、小川に接して印象深かったことは、『文藝』への愛惜だった。伝統ある『新潮』が国内文壇を軸に編集されていたのに対し、『文藝』は「今の時代の文学的表現」を編集方針とし、ゆえに、日本はもとより欧米や中国における同時代の文学の動向もつとめて紹介しようとしたこと、また、思想雑誌的な性格も加えて若い読者層の強い支持を得たこと、発行部数で『新潮』を抜く有力誌となったことなどを、小川は語ってやまなかった。

戦争の拡大する時代、強まる言論弾圧のなかで、中野重治や宮本百合子などの作品に誌面を提供すべく尽力、他方で小林秀雄のドストエフスキイ論も連載するという広がりも『文藝』にはあった。

戦前・戦中に光彩を放った『文藝』が復刻されることはじつに意義深い。

「吹雪く蔵王」　深田久彌

「現在における文芸上の我立場・主張」

「大学内の文学運動」

『文藝』復刻版刊行を喜ぶ

川津　誠（聖心女子大学教授）

古い文芸雑誌が復刻される、というのは、その時代と文学を研究する人間たちにとってとても嬉しいものだ。『文藝』は戦前戦中の代表的な文芸専門誌である。ここには、文学史のなかに確実に位置づけられアンソロジーには必ず選ばれる、といった作品はあまり多くはない。しかし明らかに、昭和十年代の文学を巡る時代状況がここには溢れている。改造社という軍部に睨まれることの多かった出版社がいかに文学表現を大切にしその表現媒体としての自らを保持していたかを、そしてその出版社と文芸雑誌が時局の中で抗いがたい波にいかにして飲み込まれていったのかを、『文藝』は伝えてくれる。三〇〇ページに達することもあった創刊の頃から、ついには四〇ページほどの薄っぺらな終刊の一冊へという変化は何より確かに時代を伝えてくれもする。時代相んで掲載されていたか、どのような広告が前のページにあるか。そういったことの一つ一つが作品の読みに影響を与える。その意味では、復刻の意義はただ研究者のみにあるのではない。読書愛好家にも、読書の別な楽しみを提供することになるのだ。

新刊書ばかりが店頭に並び、数年前の作品でも文庫化されていなければ手に入りにくくなった現在、このような「復刻版」の刊行は、「文学」への意志を不二出版が示して見せているのだと言える。研究者、読者はその復刻を手にし活用することによって、同様に「文学」への変わらぬ支持の姿勢を示したいものである。

『復刻版　文藝』を推す

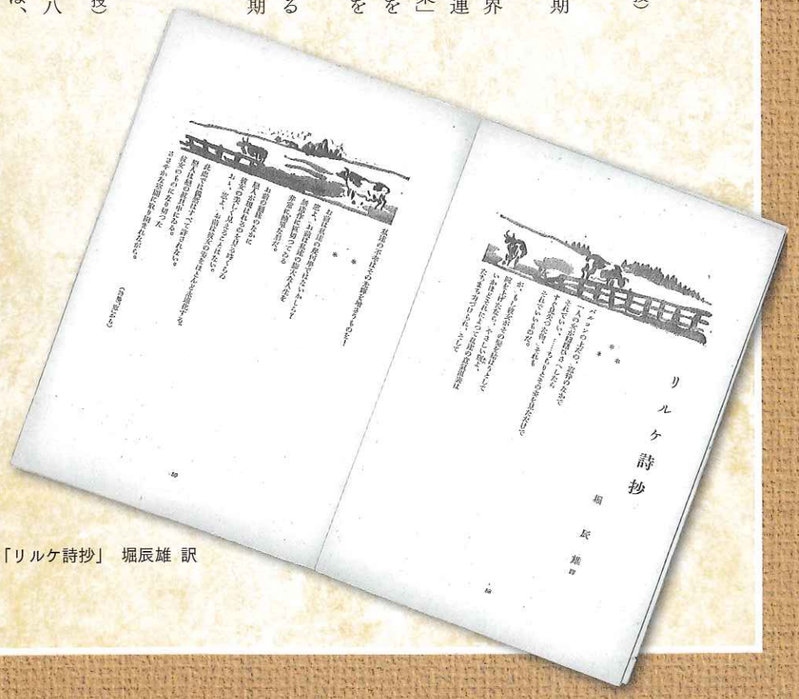
木村一信（立命館大学名誉教授・プール学院大学学長）

一九三三年（昭和八年）の後半期は、日本の現代文学史におけるエポック・メイキングとも言うべき時期であった。厳しい弾圧によってプロレタリア文学が壊滅し、文学界は新たな〈文芸復興〉へと足を踏み出した。改造社による『文藝』は、そうした機運を誌面全体に大きく取り込んでこの世に生み出された。「敗戦前の昭和文学の最も多様な開花と成熟の時期」の訪れを強烈に、しかも内容豊かに盛り込んで創刊されたのがこの『文藝』であった。

『新潮』や、時を同じくして創刊された『文學界』に比して、より先進的な企画を毎号のように打ち出し、積極的に西欧やアジア各地の作家や作品の紹介を試み、新人作家や女性作家の登用にも意欲的であった。石坂洋次郎、田宮虎彦、井上友一郎、林芙美子、中條（宮本）百合子らが活躍し、張赫宙、中村地平、真杉静枝といった〈外地〉を描く特色ある作家らも生み出した。また、織田作之助の「夫婦善哉」は〈文芸推薦作品〉として世に出、一世を風靡した高見順の「如何なる星の下に」は、戦火の足音の強まるアジア太平洋戦争開戦直前期、確実に失われゆきつつある庶民の享楽と哀歓とを描き出した。文芸誌では初めてという挿絵付き（三雲祥之助・画）で連載されたことも画期的であった。

『文藝』一二九冊は、文学がいかに時代や社会と共に歩み、それらの動向を反映するものかを如実に示している。文学のみならず、歴史、社会、文化などの幅広い分野での研究、関心に応える貴重な第一級の資料である。

「小祝の一家」　中條百合子



「リルケ詩抄」　堀辰雄 訳

本文の見本

創刊の辭

我社は文學復興の聲我全交遊に滿るが故に、一時の出來心から本誌を創刊したのではない。我社の文學に關心するは既に久しいものだ。殊に彼の「日本文學全集」を集大成して慈海の如き我大衆の喝采、割期的事功を擧げたことは歴史的事實として昭明である。

然るに我國の文學が最近委靡として振はず、文藝の貧困をかこつもの多きは何に起因する。我々は我文學の徒が社會の飛躍に心到せず、依然淡陰の文壇意識、社會意識に支配せられて廣く世界の新しき主潮を取入れるのを怠つてゐたのだと斷ずるに躊躇しない。

我「文藝」はかかる因循、退嬰の空氣を打破して我民族飛躍時代にふさはしき新文藝の建設のために誕生したものである。

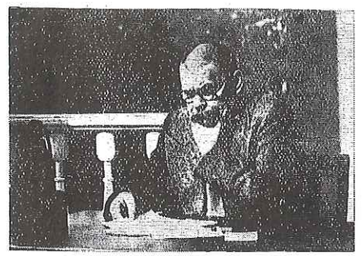
我民族は現在劃期的の飛躍途上にある。我文學またその歸趨に低迷して居るとは云ふものの、現下は實に偉大なる文學の出現する胎生期であり、黎明期であるのである。

此秋、我「文藝」は新造戰鬪艦の如き雄姿を以て生れ出でた。その希求するところは我全大衆へ偉大なる文學を贈るにある。民族飛躍期の偉大なる藝術を生産せんためにある。我々は一路勇敢に與へられたる役割に進發せんとするものである。

我大衆の熱烈なる、そして親愛なる支持を期待してやまざるものである。

主要執筆者

青野　季吉　岸田　国士　徳永　直　藤森　成吉
阿部　知二　北川　冬彦　戸坂　潤　舟橋　聖一
石川　達三　北原　武夫　豊島与志雄　堀　辰雄
石坂洋次郎　草野　心平　中島　健蔵　堀口　大学
伊藤　整　小林　秀雄　中野　重治　本多　顯彰
井伏　鱒二　坂口　安吾　中村　正常　正宗　白鳥
宇野　浩二　島木　健作　新居　格　三木　清
宇野　千代　清水幾太郎　丹羽　文雄　宮本百合子
円地　文子　周　作人　萩原朔太郎　三好　達治
大宅　壮一　神保光太郎　長谷川如是閑　村山　知義
岡本　一平　芹沢光治良　林　房雄　室生　犀星
岡本かの子　高見　順　林　芙美子　保田与重郎
尾崎　士郎　高村光太郎　葉山　嘉樹　山本　実彦
織田作之助　武田麟太郎　火野　葦平　横光　利一
亀井勝一郎　太宰　治　広津　和郎　魯　迅
河上徹太郎　張　赫宙　深田　久弥
川端　康成　壺井　栄　福田　清人
上林　暁　坪田　譲治　福原麟太郎



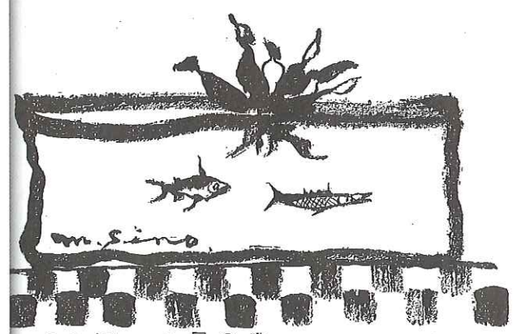
特別寄稿

肥大漢

マクシム・ゴーリキイ

かれは、まるで深い穴のふちにでも立つてゐるやうな工合に、窓邊に立つてゐた――家々の壁や、鋪裝廣場の上をかけてゆく、雲のかげと、どんよりした陽光の斑點との、めまぐるしいうごきを見つめながら。下の廣場では、ちやうど光と影の遊戯にふけつてでもゐるやうに、せはしさうに、チンチクリンの人々が走りまはつてゐた。上から見ると、その人たちは、一面にきたない石でおほはれた地面に、ぎうつとおしつけられた、人形みたいにおもはれた。マリーナがかれに示した冷淡な態度が、かれの心のうちに、手中の玉をうしなつたといふやうな、不安な氣持をよびおこした。

――かの女が、はたして政治警察につとめることができるだらうかといふやうな、あんな馬鹿げた疑問をぼくがおしたことを、かの女は、どうやらさとつたらしいな……



淺草祭

川端康成

序

「淺草紅團」の前編は、次の四種の單行本がある。「淺草紅團」（先進社發行）、「新興藝術派文學集」（改造社「現代日本文學全集」）、「淺草紅團」（春陽堂「日本小說文庫」）、「淺草紅團」（「改造文庫」）。――春陽堂發行「モダン東京圓舞曲」中の「淺草紅團」は、抜き書きであつて、全體の三分の一にも足りぬ。

この續稿の讀者は、右の四種の單行本のいづれかにより、前編を參照下さるもよいが、前編未見のままにても、續稿の觀賞には一向差支へない。作者の藝術的良心から云へば、寧ろ前編は讀まれぬ方が幸ひである。私は本誌七月號の豫告にも、次のやうに書いておいた。

「それから早くも足かけ五年の歳月が流れた。私は先進社版の『淺草紅三種の

関連図書（復刻版）

文學界

全42巻・別冊1
文藝春秋 発行　一九三六（昭和11）年七月～一九四四（昭和19）年四月
別冊＝解説（樫原修・田中励儀）・総目次・索引
A5判・上製・総約21、000頁
推薦＝池内輝雄、栗原敦、紅野敏郎、長谷川啓
本体揃価格630、000円＋税　全巻完結

創刊当時の編集同人は武田麟太郎、林房雄、小林秀雄、川端康成、深田久弥、広津和郎、宇野浩二の七名。創刊以来、個人主義と芸術主義を積極的に主張する立場を明確に掲げ、昭和一〇年代文学に大きな役割をはたした。

弊社では未復刻であった、第三巻第七号から第一一巻第四号までを復刻する。

◎配本一覧

第1回	第1～6巻（昭和11年7月～12年6月）	本体90、000円＋税
第2回	第7～12巻＋別冊1（昭和12年7月～13年6月）	本体90、000円＋税
第3回	第13～18巻（昭和13年7月～14年6月）	本体90、000円＋税
第4回	第19～24巻（昭和14年7月～15年6月）	本体90、000円＋税
第5回	第25～30巻（昭和15年7月～16年6月）	本体90、000円＋税
第6回	第31～36巻（昭和16年7月～17年9月）	本体90、000円＋税
第7回	第37～42巻（昭和17年10月～19年4月）	本体90、000円＋税

女性改造〈戦前編〉

全12巻・別冊1
改造社 発行　一九二二（大正11）年～一九二四（大正13）年
別冊＝解説（澤正宏）・執筆者索引
A5判・上製・四面付け・総1、770頁
推薦＝阿毛久芳、佐々木幹郎
本体揃価格125、000円＋税

一九二二年、「不当なる忍従を強いられ、奴隷として待遇されつつある幾百万姉妹解放のために」（創刊号巻頭言）本誌は誕生した。社会主義色の濃い総合雑誌として成功していた『改造』の姉妹誌として文学・評論・科学分野での豪華な執筆陣を擁し、一九二〇年代のフェミニズムの旗手である女性たちが多数執筆した。

貴司山治（きしやまじ）全日記（一九一九年～一九七一年）

DVD版全4枚（人名検索機能付き）・別冊1
推薦＝鶴見俊輔、ノーマ・フィールド、佐藤卓己
本体揃価格287、000円＋税

貴司は新聞記者、通俗小説家をへて、一九二八年に日本プロレタリア作家同盟に参加する。二度の検挙、作家同盟解散を経た後も、雑誌『文学案内』（一九三五～三七年、弊社復刻済）を発刊し、大衆との新たな連帯の形を模索したが、弾圧は熾烈をきわめ、三度目の検挙ののち「完全転向」する。その後内モンゴルを旅行、その行政と風俗、要人との交流を記録した。戦後は開拓農民運動に参加し、雑誌の発刊や、小説配信を専門とする通信社を設立しながら、多くの大衆小説を発表する。

プロレタリア文学史、社会運動史、ジャーナリズム史の再考を促すために研究者必携の資料である。

Disc1	日記（一九一九年～一九四四年）	本体100、000円＋税
Disc2	日記（一九四四年～一九七一年）	本体100、000円＋税
Disc3	「地下鉄争議ノート」（一九三三年）	本体40、000円＋税
Disc4	「蒙古日記」（一九四三年）	本体40、000円＋税
別冊	『貴司山治研究』（貴司山治研究会 編）	本体7、000円＋税

現代日本詩集　一九二七年～一九四四年

全5巻＋別冊1
別冊＝解説（澤正宏）・執筆者索引
A4判・上製・四面付け・総1、770頁
推薦＝阿毛久芳、佐々木幹郎
本体揃価格125、000円＋税

昭和戦前・戦中期における「現代詩アンソロジー」の集大成！

昭和戦前・戦中期にかけて、その年に活躍した詩人とその作品を紹介する「年鑑詩集」がほぼ毎年刊行されていた。有名無名を問わず多くの詩人を紹介するこの詩集は、まさに当時の「詩壇の縮図」ともいうべきものである。本資料集成には、一九二七年～一九四四年にわたって刊行された「年鑑詩集」二二点が収録され、総一、一〇〇名にもおよぶ詩人のデータ及び三、八〇〇の作品が含まれている。